

2. 復興状況・ボランティアの活動状況

○復興状況

率直な感想は「思ったより進んでいない」というものでした。震災から2ヶ月以上が経ち、連日にわたって政府・自衛隊・各自治体の動きが報道されますが、被災地ではまだまだ震災被害が目に見えて残っています。

液状化現象に襲われた浦安市でも、ライフラインの復旧（下水使用は4月15日から）・大通りや公共施設の補修は概ね済んでいましたが、大通りから道を一本入った住宅街では壁が傾き道路は波打ったまま、やっとその補修工事が始まったばかりでした。

市職員の話では、「梅雨入り前になんとか住宅地の陥没箇所（雨水が溜まる）の復旧を終わらせたい」とのこと。

津波被害の大きかった南三陸町・石巻市・女川町では、ひとまず道路を覆っている瓦礫と泥を端に寄せ、復興作業車が通れるようにした上で、一面に広がる瓦礫（ガレキ）の山を自衛隊の作業車が撤去し始めている状況でした。

倒れたビルや流された船・車・瓦礫の多くはそのまま残っていました。（復旧には膨大な時間と労力がかかりそうです）

南三陸町では、流された電柱が建て替えられ1週間ほど前に電気が復旧したそうですが、水道はいまだ町内で1%しか復旧しておらず、川（沢）の水を使った生活を送っておられました。自衛隊は給水活動や駐屯基地で被災者に風呂を提供するなど、ライフラインの支援にも力を注いでいました。自衛隊駐屯基地（お風呂は写真右のテント）



○ボランティアの活動状況

ボランティア作業は、民家や集落の泥のかき出し・瓦礫の撤去・支援物資の仕分け・思い出の品（写真など）の洗浄・被災者のお使い・被災児童の世話など被災者のニーズに合わせて多数ありました。

いずれも私的な活動のため、被災者からの依頼がなければ勝手に作業することはできません。

阪神大震災と比較して、被災範囲が広いにもかかわらず、都市部から離れている（交通の便が悪い）ためか、これまでの累計ボランティア総数が少ないようです。震災から2ヶ月経っても被災地は泥と瓦礫に埋もれた状況で、まだまだボランティア（人手）を必要としています。

3. 被災者の声（ボランティアを通じて聞いた生の声）

民家に流れ込んできた泥や瓦礫の撤去は自己負担とのことでした。（行政がやるべきですが役場も被災しているため政府が動かなければならないと思います）

過疎・高齢化が進む農村地域で、民家に流れ込んだ大量の瓦礫と泥の撤去作業をさせてもらいながら、ボランティアの力は大変有効だと感じました。

しかしボランティア人員は全く足りておらず、まだ依頼を出されていない被災者もたくさんいらっしゃるようでした。

側溝に溜まったヘドロの掻き出し作業をさせていただいた別のお宅では、家屋内は家族で掻き出し作業をなされたそうです。

「でもそれで疲れてしまって。側溝の臭いも気になるけれど掃除する気力が起きなかったんですよ。申し訳ない。」と話しておられました。

命からがら逃げ出したあと、避難生活をしながら2ヶ月間、不安のつきまとう不自由な生活と並行して泥の掻き出し作業を必死にされてきたのです。

チャリティーで販売していたTシャツにボランティアセンター長のメッセージでこうありました。「今日も笑顔で明日を目指し…」

明日は勝手にやってくるものだと思っていた自分の心が苦しくなりました。

全国から集まったボランティア

